
シンポジウム趣旨説明

加々美光行

〈愛知大学国際中国学研究センター所長・COE 拠点リーダー〉

このシンポジウムの表題、「激動する世界」が頭についておりますけれども、何かそれを映し出したような今日は台風が直撃するというそういう、言ってみれば私ども主催者から見れば、あまりありがたくないことなのですが、にも関わらずこんなにたくさんの方々がこの会場に足をお運びくださり本当に感謝に堪えません。

ご存知のように2001年「9.11」の例のニューヨークの世界貿易センターの自爆テロ以来、世界はいつそう混迷を極めてきております。もちろん世界の混迷はその時に始まったものではなくて、89年の冷戦の崩壊から激動は始まったといつかまいせんけれども、とりわけ重大なポイントは民族主義、世界のいたるところに激しいナショナリズムが吹き荒れていることです。日本と中国は、その意味ではまだナショナリズムという災禍といえますか、大きな激動に、ナショナリズムを軸とした激動に組み込まれる、襲われるという状況にはなっておりませんが、にも関わらずご承知のように2004年8月初めにごございましたアジアカップのサッカー選手権大会で見られたような中国側からの反日感情、それに対応するかのように日本側からの非常に強い反中感情が相当前面にあらわれるようになりました。

問題はかつて周恩来首相が、1972年の日中国交正常化の際に日本に対して戦争賠償請求をしないと発言した時、日本の国民に負担を負わせたくない、日本国民に過剰な負担を掛けたくないという主旨のことを述べられ、一般国民と政府戦争指導者を分けるという認識の下で対日戦争賠償放棄をしたわけです。

後ほど私自身の報告の時にもう一度触れますけれども、当時は日本国民と中国国民との国民間のレベルでは、敵対的感情がまったくなかったとはいわないまでも、ほとんど見られなかったわけです。今日は、政府間の対立のみならず国民間の敵対感情が強く、その背後にナショナリズムがあることはご承知のとおりです。したがって、この私どもが現代中国学を掲げる際、同時代の中国を研究する、あるいは学ぶということではありますが、この同時代の中国を学ぶ際に民族問題は避けて通ることはできない。

本日の国際シンポジウム、あるいは明日の国際シンポジウムのテーマが、日中関係と民族、文化にテーマ設定をしておりますのは、まさにそういうこの時代に対する危機感からこのシンポジウムのテーマをもたらしたということでございます。私どもの現代中国学は中国について古い中国は好きだ、例えばシルクロードに代表されるような、あるいは敦煌の壁画、莫高窟の壁画、あるいは摩崖仏といった遺跡、文化財、さらには唐宋時代の漢詩などに対しては非常に憧れの念を持っている。こうした日本人の心情は司馬遼太郎の歴史観の中にも如実に表れています。しかしながら、当代、同時代の中国に対しては一貫して日本人は違和感を禁じえない状態にある。

この点は意外なことですが現在だけでなく、戦前もまたそうであったわけです。日中戦争を引き起こした時代の日本人の中国観もまた同様に、例えば東条英機をはじめとする戦争責任者たちは、漢詩を読み、また自ら漢詩を書くといった人々が少なくなかった。陸軍士官学校を含め高等教育機関では例外なく、指導者の素養として唐宋時代の詩などを大変好んで教えたからです。しかしながら当時も同時代の中国に対しては極めて強い侮蔑の念を持っていた。ということは一人東条だけでなく、およそ日本の知識人、指導階層のほとんどの人がそうであったし、場合によってはまた民衆もそういう傾向を持っていたということでもあります。そういうありかた、つまり同時代の中国に対する本当の意味での相互理解を重視する姿勢が戦前戦後そして今日に至るまでなお一貫して正されていない。

学問の世界では地域研究というものがございませう。地域研究というのは開発途上国、あるいは昔で言えば後進国の研究、アジア・アフリカ、ラテンアメリカなどを中心とした地域の研究、これを地域研究と呼んでまいりました。その名前の由来は無論アメリカにあります。アメリカのエリアスタディー（Area Studies）は1946、7年にハーバード大学のフェアバンクとドン・マッケイの両教授が発起したのが原点であります。

およそ中国学、中国研究のみならずあらゆる途上国研究は私が申したのと同様の傾向を実は帯びているのです。例えばイラン、イラク、中東についても、チグリス・ユーフラテス、フェニキア、エジプトなどの古代文明の発祥地ですからその古典古代には多くの憧憬を抱いていますが、当代のイラン、イラク、中東に対しては決してそうではない。こういう傾向は地域研究に根深くございませう。私はアジア経済研究所というところで24年にわたって地域研究をやってまいりました。その実感の中から実は、相互理解がもっと進んでいなければならない隣国の朝鮮半島と中国大陸の当代の研究について、決定的な学問上の疾患がある、欠陥がある。それを何としても克服しなければならない。とりわけ学問研究上の人材に著しく不足している。

人材に不足しているというのはどういうことかということ、日米関係では実は年間で一万人以上の人がアメリカ大陸からディグリーをとって帰ります。ディグリーとは修士学位あるいは博士学位といったものです。ところが中国に留学して帰国する学生の中で学位をとって帰ってくるのは、実は正確な数字は文部科学省が出しておりませんが推測では多く見ても年間で数百人のオーダーです。つまりアメリカと比較して50分の1から100分の1の人材しか養成できていない。

このような惨憺たる状況下で今、日本と中国の間に特に国民間にかなり深刻な敵対感情が生じている。この状況をどのようにして克服していくか、もちろんまだ明確な指針があるわけではありませうけれども、私どもの学問上の挑戦として先ほど学長からお話がありましたように、本COEは、新しい学問方法論の構築を通じて本格的な人材養成を図ることによって、以上のような状況に少しでも風穴を開けようという目的があるのです。ただ今回のCOEには博士課程の人材養成に限定するという制限が加わっているものですから、当面は博士課程の人材養成で出発点を置いてスタートしております。

3年間博士課程に在籍する日中両国の学生がこのICCSでは45名に上ることになります。おそらく今後5年ぐらい後にはもっとこの数が増えていくと私は思っていますが、国境を跨いで日中の両方で人材養成を行うというチャレンジであります。

無論、学部教育では1997年に創設された現代中国学部がございまして年間200人の学士を生み出

す、4年合わせると800人の学生が在籍しております。これについても同じ動機から学部を創設したわけでありませけれども、本 ICCS はそれをもっと高レベル、つまり相互に深く中国をあるいは日本を理解しうる、そういう優れた人材を養成する目的でこの事業を始めたわけでありませ。

研究レベルでも、実は中国研究を中国から見て外国人である私ども日本人あるいは、欧米人、東南アジアの人々がやる場合、そこに研究方法論上の問題が発生する。およそ科学研究は研究対象の現状を変革する熱意のもとにおこされるものですが、外国人が研究対象としての中国の現状を変える権利は本来ないわけでありませ。そこで大切なことは日本だったら日本、アメリカだったらアメリカが中国と結ぶ関係、つまり日中関係、米中関係、さらには東南アジアと中国との関係の現状を変えていくという資格はあるということだ。この点に強い目的意識を持って現代中国学は構築されていかなければならない。

日本が単独で、あるいは私どもの ICCS という小さなグループがせいぜい100人オーダーの人的資源で何かをしようとしても状況を変えることはできません。それを知った上でなおかつ、本 ICCS は大胆なというか本来自分の力に余ると思われる挑戦をしようとしているわけで、このシンポジウムも年一回行いかつ研究交流でも全世界規模の学術ネットワークを形成して研究を行っていく。

COE の期限は5年間だので、とりあえずは2007年3月で期限がきれます。しかし私どもはその期間内で本事業を終わらせるつもりはまったくございませ。この事業を永続的に続け、そして状況を相互理解が可能になる、そういう状況を生み出すまで、また生み出した後も本事業を展開し続ける。

私ども愛知大学は全国的に見れば決して大きな大学とは言えませ。その意味では、最初は大海に小石を一個投げるような小さな波紋を呼ぶ、その程度の出発でしかありえないのですが、しかしこの波紋をより大きくしていく。愛知大学だけではなくて様々な大学が私どもと同じ歩みをしてくれる、そういうことによって小波が大波となりついに世界的状況を変える。

つまらない、上等ではない、品格を欠いた感情的な民族的対立感情が私どもの小さな試みの中から突き破られて、そして真の相互理解を世界的枠組みの中で達成できることを念じて、今日の国際シンポジウムを開催させていただきたいと思ひませ。